

浄信寺通信

平成30年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

ものみな金色 こんじき

サッカーのワールドカップの予選で日本中が一喜一憂していた六月二十七日午前。二〇一四年JAXAが打ち上げた太陽系の成り立ちや、生命の起源の手掛を探るミッションを携えた小惑星探査機『はやぶさ2』



が、三年半かけて三十二億キロの行程を経て、地球から三億キロ離れた目的地の「リュウグウ」に到着したニュースを伝えていた。それより一ヶ月ほど前、オーストラリアの環境・植物学者デイビッド・グドールさんが五月一日、自らの意思で一〇四年の人生を終えた。自殺ほう助が認められているスイスで、催眠鎮静薬の投与によって、ベートベン「歓喜の歌」を聞きながら命を終えたとの報道がなされていた。

たわけではなく、生活の質(クオリティー・オブ・ライフ)が低下していたことから、自死の決断をしたと語っていた。

こうした頭脳明晰な学者の自殺の報道は、自殺の決断を貫徹した強い人間。自ら命を絶つ自由は、現在ではスイス当局が許可し、人間の基本的な権利にもとずいた、尊厳を持つて行われ、何か素晴らしいことのような印象を与えかねない報道の姿勢に、違和感を覚えた。ちなみにネットで検索してみると、『七〇万円「安楽死」を手に入れる究極のメデイカルツーリズムがスイスで人気沸騰中!』この頁には、安楽死する目的でスイスを訪れた「自殺旅行者」が、二〇〇八年からの五年間の統計では、六一人にも上と、自殺幫助団体が発表した事が記載されていた。こうしたツアーがある事自体驚いたのである。

このグドールさんの「生活の質が低下した事が、自死の決断をしたと動機」との言葉を耳にしたときに、まず頭に浮かんだのは、二年ほど前の二〇一六年(平成二十八年)七月二十六日未明、神奈川県相模原市緑区にある、神奈川県立の

平和公園墓参のご案内

日時： 8月12日(日)
13日(月)

午前8時頃～午後1時頃



※「はやぶさ2」
JAXAの小惑星探査機。重量 600kg、大きさは 1.0m x 1.6m x 1.4m。2020年末小惑星「リュウグウ」からサンプルを採取して地球帰還予定

知的障がい者福祉施設に、元職員
の男性A（犯行当時二十六歳）が侵入
し、入所者十九人を刺殺し、入所者・
職員計二十六人に重軽傷を負わせた、
戦後最悪の大量殺人事件として日本
社会に衝撃を与えた「相模原障がい者
施設殺傷事件」の容疑者が語った動機
であった。

マスコミの報道によれば、この容
疑者は、「障がい者は不幸しか作れな
い。いない方がいい」事件後一部報道
機関の手紙での取材で、重度・重複障
がい者を「人の幸せを奪い、不幸をば
らまく存在」だと主張し、その上で
「命を無条件で救うことが人の幸せを
増やすとは考えられない」「意思疎通
がとれない重度・重複障がい者は安
楽死の対象にすべきだ」などと、殺害
を自己正当化する主張を繰り返して
いると、報道されていた。

こうした容疑者の発言に対して、
「^{ねぎら}「**「悪い言葉**をかけた」・「**応援して**
いる、差し入れしたい」・「よくやつ
た」のつぶやきが氾濫した。中には、
とても常識ある人の発言とは思いた
くない、「障がい者という税金食い潰
すだけのやつらを殺処分した英雄」
等と、匿名性の強いネット上ではあ
るのだが、無責任な共感や賛同する
多くの発言があったと記憶している。

他方、刑法三九条の法律に沿つ
た刑事責任能力の喪失と判断され、
殺人・放火・強盗・強姦など重大犯
罪を犯しながら無罪になる事例も
少なくないのも事実である。こう
した被害者がどんな思いでこの「相
模原障がい者施設殺傷事件」を考え
られているのか？そんな事も思う
のである。

■

グドールさんの「生活の質が低
下した事が、自死を決断した動機」
と「相模原障がい者施設殺傷事件」
の容疑者が語った「意思疎通がと
れない重度・重複障がい者は安楽
死の対象にすべきだ」言葉が状況
や立場は異なるにしろ、人間の内
面性に於いては、無関係とは思え
ないのである。それは他人事では
なくて、私事で恐縮なのだが、昨年
年末九十四歳の母が亡くなったの
だが、十年近く施設に入所して車
いす生活で、意思疎通も難しく文
字通り「生活の質が低下した」状況
であった。はたして自分自身がそ
うした立場になった時に「早くお
迎えに来て欲しい」等と思う事は
ないのか？自信が無いのである。

相模原の容疑者の犯行が、精神

科に強制的に措置入院した経緯の持
ち主であり、特異な行動と短絡的に
結論が出され忘れ去られしまう問題
ではない。先述のネット上の容疑者
に賛同する意見は極論であり、黙殺
を決めつける問題でもないと思うの
である。そこには、誰もが、内面に
は差別なり偏見というものをもって
いる事実を、重く受け止めなければ
ならない。それはある意味では人間
の向上心の糧かてになると、同時に弱者
に対する攻撃性の感情を刺激する引
き金にもなりかねない。

同時に中村淳彦著『崩壊する介護
現場』で指摘されている「介護の世
界には夢や希望はなにもなく、将来
性もあるとは思えない。あるのは
【需要】だけである」そして「介護は
福祉ではなくビジネスとなり果てて
しまった」その結果障がい者施設の
職員の給与は宿直を入れても20万
円前後が一般的。労働の内容に比
べ、対価があまりにも安すぎる現状
を一人一人が考えなければ、殺され
た人々は、**浮かばれない**のである。

そんな問題・命題を問われた事件
であったと思うのである。

そうした社会的な課題と共に、人
間の「いのち」をどう捉えるのか、そ

の大きな命題があると思うのであ
る。

■

現代人の多くは、自分をも含め
て、人間の「いのち」は、科学的生物
学見地から、人がこの世に生まれた
時に生まれ。そして死によって死
ぬ。そういった了解のもとに生きて
いる。言葉を変えて言えば、現代人
の「いのち」は、自分自身の個人に帰
属するものである故に、自己責任に
おいて自由にできるべきであり、基
本的人権でもある。そうした思考ロ
ジックは、多くの学者が説くところ
では、西欧の自我の思想からきてい
ると言われている。つまり【自我（ア
イデンティティ）Identity】を持つ
て生きる事が、人生の望ましい生き
方である。グドールさんが、「生活の
質が低下していたことから、自死の
決断をした」との言葉の背景にはそ
うした【自我の確立】の思考がある
気がしている。しかし【自我（アイ
デンティティ）の確立】その言葉の
響は現代人の心を魅了するけれど
も、その基もとになる考えは、自分自身
の尺度（モノサシ）・価値観・経験が
基準になつてゐるのではないのか？そ
の価値観たるもの、自分に都合の良
いものを尊重して、都合の悪いもの

を、排除・排斥しているのではないのか？そんな危惧を抱くのである。それが、まさしく【煩惱成就の凡夫】であると、ツツコミを入れられてしまつては立つ瀬がないのであるのだが・・・

二五〇〇年前お釈迦さまは、四門出遊（しもんしゅつゆう）のエピソードに象徴されるように、「生・老・病・死」の誰もが避けられない人生の苦しみ・迷いや、執着から覚める（解脱）ための縁起（因縁）を説いた。即ち一切衆生の「いのち」が、「生・老・病・死」に生きるこの「いのち」が、多くの関係性によって成り立っている（縁起するいのち）事を明らかにした。乱暴な言い方をすれば、「私たちは、自分で生きていくと思ひこんでいるけれども、そうではなくて、歴史・時代を超越した、文字通り様々な縁によって生かされていく身ですよ、それに早く気づきなさい（阿弥陀さまは）いつでもどこでも 待っていますよ！」それが仏教の教えであり、また親鸞聖人が示された生き方であつたと思ふのである。

親鸞聖人が最も大切にされた經典

の「仏説無量寿經」（大經）には、阿弥陀仏の四十八の願が示されている。三番目の願は、「悉皆金色の願」といわれている。

原文 【設我得佛・國中人天・不悉真金色者・不取正覺】

読み下し たどひ、われ仏を得たらんに、國中の人・天、ことごとく真金色ならずば正覺を取らじ 意味

阿弥陀仏（詳細にいえば法蔵菩薩）が「仏となるとき、國中の人が、全て金色でなかつたならば、仏にならないつもりだ」と誓いになった。

小生は、經典の専門知識には、疎いのだが、先人達の解釈では、この願は、阿弥陀さまのさとり浄土では、すべての「いのち」が金色に光り輝いており、一つとして輝いていない「いのち」はない、無駄な「いのち」はない。つまり、仏さまの目から見れば、すべてのいのちは本来金色に輝いており、すべてのいのちは平等であり、価値のないいのちは無いのだ」と説かれている。

行政書士・葬祭カウンセラー・終

活問題や、寺院を取り巻く問題に精通するスペシャリストとして、各地の寺院研修会の講師として活躍されている勝桂子氏の著書『聖の社会学』には、僧侶の法話は上滑りしている、経文解釈や仏教理念の話は山の頂きで語られ、例外はあるのだが、勝氏によれば市民感覚からは、かけ離れている。抹香臭い。説教臭い。心の奥に響かない。言葉が表面的であり、重みがないそれは、僧侶自身が、本当の意味での【生老病死】に触れていない、苦の現状に関わっていないからだ、分析されている。まさに言い得て妙と言わざるを得ない。

二〇一六年八月六日東大先端科学技術研究センターで開催された「津久井やまゆり園」で亡くなった方たちの追悼する集会で、犠牲者のお姉さんの匿名のメッセージが読み上げられた、そこには、私は親に弟の障害を隠すなど言われ育ってきた、亡くなった今は名前を絶対に公表しないでほしいと言われています。この国には優生思想的な風潮が根強くあり、全ての命は存在するだけで価値があるという事が当たり前ではないので、とても公表する事はできません

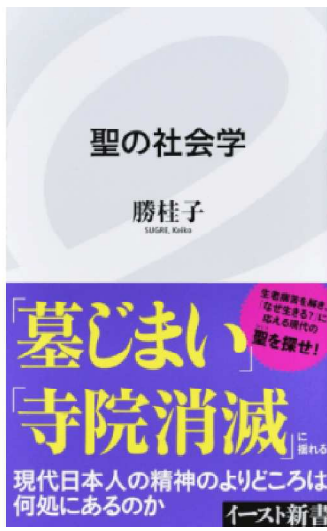
ん」とあつた。言うまでもなく、この遺族の【全ての命は存在するだけで価値がある】の言葉こそ、まさしく勝桂子氏曰くの、僧侶の上滑りの経文解釈の悉皆金色の願を凌駕する重みがあると思うのは、小生一人だけだろうか？

NHK出版新書の更科 功著『絶滅の人類史 なぜ「私たち」が生き延びたのか』には人間は、他のすべての生きものたちとは本質的に異なる別格の存在だと考えがちだが、ホモ・サピエンスつまり我々現代人にいたる道筋は、DNA解析等の新しい技術によって、数々の偶然と危険・試練を経て今存在している事を改めて知る事ができた。

今から七〇〇万年前、類人猿より森林から草原へと追いついてられた最初期の人類は直立二足歩行を獲得した。それは同時に他の肉食動物に襲われる危険にさらされながら、やがて二四〇万年前には、集団的な社会生活と道具を使用する、現代人に連なるホモ・ハビリスが出現するに至って大脳を進化・発達させた。

三〇万年前、ネアンデルタール人

(ホモ・ネアンデルタール人)がヨーロッパに出現し、ほぼ同じ頃に、アフリカの大地に現れたホモ・サピエンスと共存していた。最近の研究では、このネアンデルタール人と現人類(ホモ・サピエンス)と関わりを持っていたとの研究もある。屈強で、大きな脳をもつネアンデルタール人が、三万年ほど前に、ホモ・サピエンスによって駆逐・絶滅に追いやられたとされている。まだまだ謎に満ちた人類の進化の過程を読む時、もしかして我々人類(ホモ・サピエンス)が、この地球上に存在せずに、知的能力を持った恐竜や、ネアンデルタール人が生き延びていたかも知れない、我々人間の寿命は長くて一〇〇年ほど、この書物を読んで【全ての命は存在するだけで価値がある】その言葉の重みを改めて考えさせられたのである。



◆ 聖の社会学 (イースト新書)

勝桂子

◆ よみがえる人生

(樹心社) 向坊弘道



ネパールの地に、西本願寺派のカトマンズ本願寺がある。この寺院の建立の基礎を築いたのが、福岡県北九州市の故向坊弘道氏であった。東京大学法学部在学中の二〇歳の時、故郷へ、東京から当時珍しかった、自家用車を自ら搬送中、自宅手前数百メートルのところ、交通事故で首の骨を折り(頸髄四、五番を損傷)その後遺症の全身麻痺のハンディキャップを負いながら、絶望と悲嘆の生き地獄の中で、親鸞聖人に出会い、自立生活へと踏み出して不動産業の向洋興産(株)を営みながら、グリーンライフ研究所を立ち上げて、同じ傷害を持つ患者の為の社会福祉活動を中心とした活動を始めた。その活動は国内のみならず、一九九二年には、「NGOグリーンライフ研究所ネパール」を設立、社

会福祉活動を中心とした活動を始められ。一九九八年、向坊さんはインドのブダガヤの地でソナムという青年に運命的な出遇いの後に、友好を深め、他力の教えに強く惹かれたラマ教の高僧でもあったソナムさんは、浄土真宗へと転向して、日本に留学後ネパールグリーンライフ研究所の所長となり、ネパールで真宗の伝道活動を始め「ネパール開教地カトマンズ本願寺」の責任者として今も活躍されている。

向坊さんは、数冊の自叙伝的な書籍を執筆されており、その書物から親鸞に出会い、ハンディがありながら、健常者以上の見事なまでの人



◆ ネパール開教地 カトマンズ本願寺 (お西)

報 恩 講 勤 修

平成30年11月9日 (金)
午前10:00~
勤行・お説教・おとき

生、この本の表題の如くよみがえる人生そのままの生き方に、深く感銘をうけたのである。

事故に遭わなければ、向坊さん自ら「大学を出て会社に勤め家族や子供に恵まれ一見幸せにみえる人生だったかも知れない、そうした一生だったら親鸞聖人の教えにも遇う事が出来なかった。もの皆金色に輝く自らの人生であった」との言葉を遺して二〇〇六年の四月十四日腎臓癌で六十七歳の生涯を終えられた。

編集後記

今年の寺報遅くなりました。少々難解で難しい課題を書きました。住職